

ジョーと彼のガールフレンドのサラはともに十六歳。

ジョーは、スポーツと女の子に夢中なごくふつうの少年。ブロンドのサラは、ため息がでるほどの美少女で、みごとに脚と胸の持ち主だった。

ある日、ジョーの家のリビングで、彼らはちよつとした議論を交わした。男と女と、どちらがタフか、についてである。

ジョーは、そんなこと当然だというように、男性はいかに肉体的に強いかを力説し、女性はフイジカルにおいて弱者だと主張した。サラは、男性は女性を保護するべき立場なのに、往々にして女性に暴力を振るう、だから、神様は女性に、決定的なアドバンテージをお与えになったのだ、と主張した。

ジョーは、これ以上の議論は無駄だと言わんばかりに、君の言う通りだ、と面倒くさげに答えた。その態度がサラを苛立たせた。サラは俄然、ジョーに挑戦状を叩きつけた。

「わかったわ。この自惚れ屋さん、男と女とどっちが強いか、試してみようじゃないの！」

サラはいきり立った。

「おい、よせよ。怪我するぞ」

ジョーは笑った。サラはますます真っ赤になって怒った。

「なによ、臆病者！」

臆病者と言われたのは初めてだった。

「なんだとお！ よおし、やってやろうじゃないか」

「いますぐ、ここだね！」

「オッケー、かかってこい！」

ジョーとサラは、リビングの家具を片付けはじめた。それから、サラの提案で、服が破れないように脱いだ。ジョーはブリーフひとつ、サラはブラとパンティだけになった。もちろんサラには下心があった。ジョーが自分のみごとな胸を見せつけ集中力を奪うこと、そして、ジョーの急所がよく見えるように……もちろん、股間のことだ！

「じゃあジョー、勝負はどちらかが完全に屈伏するまでつづけること、ルールはなし、どの部分への攻撃も可。それから、どちらかが『参った』と言っても、相手が認めないかぎり勝負は終わらない。つまり、「参った」と言われた側が、相手がほんとうに苦しんでいると認めるか、あるいは一方が失神するまで勝負を続けること。いい？」

サラは微笑みながら言った。

ジョーはちよつと鼻白んだ。彼は、勝負が始まったらすぐに「参った」と言うつもりだった。彼女を傷つけたくなかったからだ。だが、サラはそういうジョーの魂胆を見抜いたかのように、

自ら彼の紳士的な計画を封印してしまった。

ほんとうにいいのか？ とジョーは思った。いざ勝負が始まってしまうえば、彼の闘争本能が彼女を手ひどく傷めつけないという保証はないのだ。

「いいよ」

ジョーは同意した。勝負が始まった。

ジョーは、テレビで見たレスラーがやるように屈み込んだ。サラは、ジョーの姿に笑いながら、無防備に彼に歩み寄り、いきなり平手打ちを食わせた。ジョーは、完璧に不意打ちを食らって目をばちくりさせた。

「男っていつもそうやって、まずはガードを固めるのよね」

サラは笑った。

「前に出るってことをしないんだから」

「いつてえ……！」

ジョーは、ぶたれた頬を撫でながら怒った。

「もう勝負は始まっているのよ、なにのんきなことしてんの？」

言うなりサラは、二度目の平手打ちを浴びせた。ジョーは思わず、両手で顔をガードした。サラは微笑み、今度はみぞおちにパンチを浴びせた。

「うっ！」

ジョーは呻き、体を前に折り曲げ、後ずさりした。サラはすかさずジョーの髪の毛をつかみ、素早い膝蹴りをジョーの顔に浴びせた。ポカッという音が引き、ジョーの鼻孔から血が噴き出した。ジョーは両手で鼻をおおった。

「お、折れちゃった……」

ジョーは涙声で呻いた。サラは、さあこれからが本番よ、と言わんばかりにニヤツと笑った。

「あら大変。そういうときは、まっすぐ立って、両脚を少し開けるの。鼻血がとまるはずよ」

サラは冗談めかして言った。信じられないことに、ジョーは愚かにも彼女の言うとおりに、脚を広げて立ったのだ。

「ばっかじゃないの！」

サラは、右足を少し後ろに引き、ジョーの股間を見つめた。ぴちつとしたブリーフに、二つの睾丸がもっこりと浮かび上がっていた。

「なぜ男が女にかなわないか、その理由を教えてあげる。一生、忘れないようにね！」

ジョーは、顔を覆っていた指の隙間から、彼のガールフレンドが脚を後ろにはね上げ、それから前に大きく振り上げたのを見た。

彼女の素足の爪先が、激しく彼の睾丸に叩きつけられた。彼の体が1インチばかり宙に浮いた。ジョーが着地し、倒れる前に、サラは彼を突き飛ばした。ジョーは壁に背中を叩きつけられた。

サラは彼の両手をつかんで広げ、思い切り膝で蹴り上げた。

「どう？」

ドガッ！

「痛い？」

ズガッ！

「降参する？」

バギッ！

「それともまだ蹴られ足りない？」

ガキッ！

サラは喋りながら蹴り続けた。

何度か残酷な急所への膝蹴りを見舞ったあと、サラはジョーを床に叩きつけ、得意気に彼を見下ろして言った。

「だから言ったでしょ、女は男より強いんだって。男には金玉という、致命的な急所があるんだから」

ジョーは、あまりの激痛に呻いていたが、まだ勝負を捨ててはいなかった。女の子相手に負けを認めるわけにはいかないのだ。

彼は、ゆっくりと、非常にゆっくりとなんとか立ち上がり、サラと対峙した。サラは再び脚を後ろに引いた。

サラの蹴りがジョーの股間を目掛けて飛んできた。ジョーはさっと体かわし、サラの額を押した。サラは床に尻餅をつき、痛そうに頭を押さえた。

ジョーは満足げに微笑んだ。しよせん女だ。彼は得意気に腰に両手をあててサラを見下ろした。と、急にサラがしゃくりあげはじめた。ジョーは慌てて彼女の傍らに膝をつき、頭を撫でさすった。

「ご、ごめん。悪かった。泣かないで……痛い目に合わせるつもりはなかったんだ、ただ……ぎやあああああああ！！！」

ジョーは絶叫した。サラは、彼が弁解している隙に、ブリーフの上から睾丸をつかんでギュッと握りしめたのだ。彼女は残酷な微笑みを顔に浮かべながら、容赦なく睾丸をひねりあげ、彼の顔を思い切り殴った。

「やっぱりだわ！ 女に暴力を振るうなんて最低！ 思い知れ、この馬鹿！」

サラはジョーを殴りつづけ、睾丸をひねりあげつづけた。ジョーは号泣し、なんとか彼女の手を引き離そうとした。ジョーの悲鳴がしだいに甲高くなっていた。

サラは、彼の陰囊のつけ根をぎゅっと握った。睾丸が押し出され、陰囊が風船のように膨らんだ。

サラは、もう片方の手を大きく振り上げた。

「お次は、これよ！」

サラは、ジョーの睾丸に思い切り裏掌を叩きつけた。ジョーは絶叫した。サラは三度、裏掌で睾丸を叩き、今度は拳を握りしめ、容赦ないパンチを浴びせた。

ジョーは失神した。

ジョーが目を覚ましたとき、彼は仰向けに倒れていた。サラは、大きく広げられた彼の両脚の間に座っていた。

ジョーは起き上がろうとしたが、彼の両手と両脚は大の字に広げられたまま、手首と足首をロープで縛られていた。ロープの先端は、部屋の壁に固定されていた。

ジョーはまだ下着姿だったが、サラはすでに服を着て、黒いブーツをはいていた。

「わかった……ぼくの負けだ」

ジョーは呻いた。股間の激痛はまだやまず、がんがん頭痛がし、今にも嘔吐しそうなほど気分が悪かった。

「ぼくは失神した……だから……君の勝ちだ」

「まだよ、ジョー」

サラは冷たく言った。

「参ったって言ってないでしょ」

「わかった。参った！ だから、ほどいてくれ！」

ジョーは苛立って怒鳴った。

「だめ。信じられない。声が嘘ついてるもん。ほんとうにあんたが負けを認めたと私が信じるか、もう一度、あんたが失神するかするまで、勝負は終わらないわ」

サラは、脱ぎ捨てたソックスをジョーの口に突っ込んだ。ジョーはもごもごと呻いたが、声にならなかった。これでジョーは「参った」と言いたくてもできなくなった。

サラは立ち上がり、ジョーの肋骨を蹴った。ジョーは苦しげに呻いた。サラはジョーの睾丸に踵を乗せた。彼女が踵に体重をかける度に、ジョーの目玉が飛び出しそうになった。それを見てサラは哄笑した。

それからサラは、ジョーの剥き出しの胸に両足で立った。ブーツの踵が、ジョーの肌に食い込んだ。

「どう、このブーツ？ 私のお気に入りなの」

彼女は、思い切り彼の胸を踏みつけ、それからジャンプした。

「泣かないで、ジョー。ひとこと、参った、と言えはいいの。それですべて終わりよ」

サラはジョーの胸に両膝をつき、爪先を睾丸に押し当て、体を上下に揺すった。彼女の膝がジョーの胸を圧迫し、ブーツの爪先が晴れ上がった睾丸を圧迫した。

「愛してるって言葉でもいいのよ。そう言えば、やめてあげる」

サラは、軽く爪先で睾丸を蹴った。

「あるいは……女のほうが男より強いって言えば、やめてあげるわ」

ジョーは涙を流しながら、悲痛な表情で呻いた。口を塞がれているため、モゴモゴという呻きにしかならないのだ。

「やめてほしくないみたいね、ジョー」

ドカツ！

サラは、思い切り爪先でジョーの睾丸を蹴った。ジョーは体を反らせて痙攣した。

「そろそろ終わりにしようか」

サラはジョーに平手打ちを食わせ、それから折れた鼻柱を殴りつけた。再び鼻孔から血が噴き出した。

彼女は立ち上がり、ジョーが目覚めたときのように、彼の両脚の間に座った。それからいきなり右足の踵を彼の睾丸に叩きつけた。つづいて、左足の踵で蹴りつけた。

「何回蹴ったら、男は失神するのか、やってみたかったのよね」

サラは両足を交互に突き出し、ジョーの睾丸を蹴った。ジョーは大きく体を反らせた。ソックスが口から飛び出したが、もはや漏れてくるのは絶叫と嗚咽だけだった。五十七回目の蹴りでジョーは白目を剥いて失神した。

「あくあ、もう終わっちゃったか。つまんないの」

サラは立ち上がった。

「これで、もう二度と男と女とどっちが強いかなんて、議論する気にはなれないよね、ジョー」

サラは、最後の蹴りをジョーに見舞い、ロープを解きはじめた。

「ん？」

サラは不審な顔でジョーのブリーフを見た。陰囊がメロンほどの大きさに腫れあがっていたのがゆっくりと縮小していた。ブリーフに赤い染みがぼつんとつき、みるみる大きく広がりはじめた。

「やべ」

サラは頭をかいた。

「二度と楽しめなくしちゃったのかな、私」